

JICA 本邦研修，研修員の帰国後の取り組みについて

—ガーナ国におけるインタビュー調査結果から—

○和田浩史郎^A，クリストファー・ベッケルス^B，松原憲治^C，池田秀雄^D，喜多雅一^E

WADA Koshiro, BECCLES Christopher, MATSUBARA Kenji, IKEDA Hideo, KITA Masakazu

大分県立宇佐産業科学高等学校^A，広島大学大学院^B，国立教育政策研究所^C，広島大学大学院^D，岡山大学大学院^E

【キーワード】 研修内容の共有・活用 研修員の変容 現地のニーズ

1 はじめに

2010 年と 2011 年に岡山大学で実施された「JICA ガーナ国別研修理数科授業改善（以下本邦研修）」に参加した教師，指導主事，行政官等（17 名，以下研修員）および研修員の配属先の上司達（以下ステークホルダー）を対象に，ガーナ教育省の教師教育局および地方教育事務所において実施した聞き取り調査の結果を報告する。

2 調査の背景と目的

ガーナでは，初等教育の理数科授業において，学習者中心授業のための指導法改善と現職教員研修において指導力向上を中心とした授業研究の普及推進がすすめられている。岡山大学で行われる本邦研修では，研修員が日本で実際の教育活動（理科授業）に触れながら，指導案の作成および教材の開発，授業研究の方法を習得し，学習者中心の授業に対する見識を深め実践力をつけるための機会が提供されている。そして，研修の成果をもとに，現地の教育関係者と研修内容を共有・活用し，授業研究などにおいても主体的に紹介・導入することが期待されている。したがって，本調査では，研修員の帰国後の還元活動の状況を把握し，現地での指導法や授業研究の取り組みの様子などを調査することを主たる目的とした。また，報告者は，本邦研修において授業研究の事後協議会における授業分析に関する講義・演習を受け持っているため，研修内容をより現地のニーズに合わせるための調査も行った。

3 調査対象と調査方法

調査対象者は，2010 年および 2011 年にそれぞれ参加した研修員と，研修員のステークホルダーに対してそれぞれ聞き取り調査を行った。質問観点として，①研修内容の共有について，②研修員と関係者との協働活動について，そして③本邦研修後の研修員の変容について，半構造化インタビューを用いて聞き取りを実施し，関係書類を収集した。

4 調査結果

研修内容の共有と関係者との協働活動について，研修員は帰国後すみやかに所属する学校などで還流報告を行っていた。所属先の現職教員研修や他の郡を含めたクラスター研修などについても講師を務めることで積極的に企画運営に関わり，研修で得た知識や技能の普及を進めていた。したがってステークホルダーの研修員に対する印象は良好であった。また，複数の研修員は日本の学校で実践的な経験を得たことが，指導法や授業研究に関する自信を深めることに繋がったと述べていた。このような研修員の言葉から，帰国後の精力的な活動に寄与したことが示唆された。一方，本邦研修の成果物であるハンドブックの活用については，他の教師らとの共有・普及が調査時点では期待したほどは進んでいない状況であった。また，授業分析法に関しては，リソースや時間等の制限の影響もあり実践された事例は限られていた。

5 今後の展望

ガーナには，JICA が以前のプロジェクトで開発したソースブックという指導案や教材を集約した資料があり，ガーナ国内で広く利用されている。本邦研修の内容をさらに効果的にするためには，このソースブックの改訂に，研修の成果を盛り込むべきだと考える。その際，研修員と現地教員の協働はもちろんのこと JICA 専門家や青年海外協力隊員と協調的にソースブックの再構築を行い，現地のニーズにより適合した形で現職教員研修を行えば，さらに効果的で継続的な授業改善の研修ができるであろうと期待される。また，報告者らが本邦研修で担当する講義や演習においても現地の教育環境や条件を最大限考慮し，本邦研修の講義や演習内容の更なる充実に努めなければならぬと感じた。

謝辞

本研究は，科学研究費補助金基盤研究(A)（課題番号 23240106）の助成を受けて行われたものである。